明石の史跡（６）大久保町と象

近世以前の明石市内の宿駅としては、大蔵谷がよく知られている。寛永１２年（１６３５）６月２１日、武家諸法度の改定にもとづき、参勤交代が制度化された（徳川実紀）。この時に大久保が追加されている。駅馬８匹が常備され飼料は明石藩が供給し、一時は大蔵谷をしのぐほどの繁盛を見せ、明石本駅とも称されたと伝える（兵庫県の地名Ⅱ）。

宿駅というからには、武士を初めとする旅人が宿泊する使節であることはいうまでもない。ところが１８世紀の初めに、この大久保に珍客が一泊した。それは好奇心旺盛な８代将軍吉宗に献上される象であった。宿泊地が大蔵谷ではなく、大久保であったところに、当時のにぎわいを実感するのである。

享保１４年（１７２９）３月１０日に長崎を出発した象が、４月１７日、大久保に到着。その夜は当地に一泊。翌朝、「小き熊手」をもった象使いを背中に乗せ、１８日の午前中に明石城下を通り、西垂水村で昼休みをとっている（『累年覚書集要』）。大久保の町では前代未聞の宿泊客であった。さぞかし多くの人々が、見物につめかけたことであったろう。

明石を通過した象は、兵庫・尼崎で宿泊を重ね、４月２２日に京都で中御門天皇に謁見。東海道を下り、５月２５日に江戸到着。２７日吉宗は観覧し、その後は浜御殿で飼育した。

この象は翌年に、江戸中野村の百姓源助に払い下げられている。飼育の経験がないために、種々の苦労があったろう。時には大暴れしたという騒動が伝えられながらも、寛保２年（１７４２）１２月に異国での生涯を終えている（年表日本歴史５）

日本歴史学会会員 茨木 一成